

文学博士護雅夫君の「古代トルコ民族史研究」に対する

授賞審査要旨

「古代トルコ民族史研究Ⅰ」は昭和四十二年三月に刊行された護雅夫君の著書である。護君は北アジアの遊牧民族の建てた統一国家、特にその国家構造・社会構成の研究家として知られており、本書には各種の漢文史料のほか、突厥碑文、イェニセイ碑文、ウイグル文献を駆使したところの、突厥の国家社会に関する研究成果を収めている。本文は三編と付編から成り、最後に英文の摘要がある。

第一編は「突厥の国家と社会」と題し、五章に分かれる。第一章「突厥の国家構造」において、著者は国家（二或は^三）の中核をなすのは可汗を出す支配氏族たる阿史那氏であるが、国家は総体として氏族部族連合の性格をもち、多くの氏族部族が集まって阿史那氏出身の「封建」的諸侯（*yabru* 葉護・*oq* 設）の采邑を形成し、それぞれ固有の族長を経て支配・徴税され、軍事力を提供しており、国家の中心から比較的遠くに居住する諸族は、可汗が直接に任命派遣する官僚（*muḍun* 吐屯）の下で固有の族長を通じて監察・徴税され、また別に貢納をおさめて独立を認められていた諸族のあったことを指摘する。そしてほかに「官僚」からなる行政幹部が存在し、大家畜所有者で世襲となっていた族長がこれに任せられ、この族長階級・官僚身分を総称してベグ（*beg*）といったという。第二章「東突厥国家内部におけるソグド人」では、この国家の内部に、従来考えられていたよりも早い時期（西暦六世紀末）から中央アジア出身のソグド人が活動し、都藍・始畢・頡利の三可汗時代にはブハーラー人・サマルカンド人・キシユ人が

コロニーを形成して同国人の首領をいただいていたらしく、首領は *clabbar* という突厥の称号を与えられたが、頡利可汗の即位にあたって、*clabbar* の上に更に阿史那氏出身の *tigim-legim* が置かれるようになったことを述べている。第三章「古代チュルクの社会構造」では、古代チュルク社会は基本的には(1)何百・何千という家畜を持つものもあるバグ (*Bag*) と、(2)一般民衆とみるべきブドゥン (*budun*) と、(3)奴隷 (*qul, kün*) の三階級から成り、ブドゥンは比較的自由で独立的な自由民であったといい、部族がさらに氏族と称すべきバグ (*bag*) によって構成されていたことを指摘し、またキルギスにおいて牧畜経済とならんで農耕経済の存在したことに注目している。第四章「突厥と隋・唐両王朝」は突厥・薛延陀と隋・唐との間の名分的関係の変遷を辿ったもので、君―臣、舅―婿、父―子、敵国の関係が政治勢力の消長と共に変化している状況を、広く中国の王朝を長上とするアジア諸国の歴史的世界の構造の中に置いて考えている。

第二編は「突厥第一帝国における官称号の研究」と題し、三章に区分されている。第一章「突厥第一帝国における *qayan* 号の研究」は、異説の多い可汗の系譜と勢力の変遷を検討したのち、初期には中央の大可汗のほかに小可汗が分立して分権的「封建」の様相を呈したこの国で、葉護可汗(莫何可汗)の治世になると諸可汗の数が減少し、沙鉢略・葉護両可汗の一族だけが汗位につくことになり、更に始畢可汗(*609-619*)のときからその数が激減することに注目し、集権的「封建」国家への変質を推論している。第二章「突厥第一帝国における *sad* 号の研究」は、*sad*(設)の称号十八例を詳細に検討し、*sad* は本来阿史那氏として可汗と同様な血統的・系譜的資格をもっていたが、可汗が君主であったのに対して *sad* は臣下であったといい、始畢可汗の治世以後に *sad* の数が急増することに注目し、そ

れを小可汗の後身と考えている。第三章「鉄勒諸部における etäbar, ikin 号の研究」においては、鉄勒諸部の首長が突厥に服属すると可汗号を去り俟利発 (eltäbar) あるいは俟斤 (ikin) と称したが、これらは可汗を出す部族以外の諸部の首長の用いた称号で比較的有力な部族の首長が eltäbar、比較的弱小なそれが ikin を称したという。

第三編は「突厥碑文割記」と題し三章に分かれる。その第一章「突厥の啓民可汗の上表文の文章」は、漢文で伝えられているこの上表文がチュルク語の翻訳であることを推論したものであり、第二章「stiči と四至」では、ウイグル語の土地売買文書にみえる stiči の語が漢語の四至の音写で、それが中国で一般的な「東↓西↓南↓北」の順によらずに、古代チュルクに固有の「東↓南↓西↓北」の順を用いたことを述べ、第三章「契丹の語源について」は、契丹を「奚族に類する者」と解する学説に対して、古代チュルク語研究の立場から疑問を提出したものであり、第四章「イェニセイ碑文に見える qu(o)γ, öz 両語の意義」においては、quγ に「溪谷の平地・川岸」、öz に「二山に挟まれた溪谷・潤谿」の訳語を与え、古代キルギスにおける河川流域の農耕生活に論及している。

最後の付編はエスllゲllクリヤシュトルヌイ、劉茂才(在ドイツ)、ペーllオゲルの突厥史研究、エスllイェーllマローフのイェニセイ碑文研究を紹介批評したもので、ソ連・ドイツ・トルコの古代チュルク民族研究の状況を明らかにしている。

以上を要するに護君の著書は、言語研究に重点の置かれていた古代チュルク語史料を、社会史の研究に活用し、漢文史料と併せて突厥の国家・社会の構造を解明したもので、細部の見解に対しては異論も提出されているが、古代チュルク系民族社会の研究を大きく前進させた業績である。なお護君は北アジア史における「発展」の問題に常に關心

をもち、遡って匈奴、降ってモンゴル帝国の研究をも行なっているが、本書で明らかにされた突厥の国家構造は、支配下の諸部族の氏族「共同体」を解体させて成立したと認められるチンギスカン・モンゴルの国家などと比較してみると、異なった「古代的」性格をもつものであり、同君の研究は、遊牧民族支配の国家に関する「永遠の封建社会論」「停滞論」に対して、反証を提出したものといつてよい。